

日本語非母語話者同士の会話参加の様相

——留学生の自由会話の場合——

岩 田 夏 穂*

The Feature of Participation in Free-Conversation between Japanese Non-Native Speakers :

How Do Foreign Students Manage their Participation ?

IWATA Natsuho

abstract

The purpose of this study is to explore the symmetrical and asymmetrical features of participation in free conversation between Japanese non-native speakers (NNS), via the quantitative and qualitative analysis of spoken interaction in Japanese by five dyads of foreign students. For the quantitative analysis, a coding system known as initiative-response analysis, based on local turn sequence was used. The data is then analyzed qualitatively by focusing on conversational topic expansion to explore how the aspects of participation are constructed via differing types of interaction.

The results show that participants tended to distribute their turns into the three following categories: (1) giving back-channel feedback and/or minimal responses; (2) providing new information based on the interlocutor's utterance; (3) asking questions regarding the topic. Furthermore, the distribution patterns of these three categories can be broken down into three different types: "spontaneous-contribution-of-information", "question-and-response" and "response". The combinations of these turn-distribution types reveal both symmetrical participation and asymmetrical participation in the sample data. However, interaction between dyads that showed pattern discrepancies (i.e. asymmetrical participation) was similar to that of symmetrical participation, confirming that in general, participation between NNS tends to be symmetrical.

Keywords : Japanese non-native speakers, free-conversation, symmetrical / asymmetrical participation, Initiative-response analysis

1. はじめに

現在、日本語教育の現場では、さまざまな会話活動が取り入れられ（村岡・三牧 2000 など）、学習者である非母語話者（nonnative speaker 以下 NNS）は、母語話者（native speaker 以下 NS）と、あるいは他の学習者とともにそれらの活動に関わる機会を持っている。現場でそのような活動を観察すると、参加者が各々会話維持の役

キーワード：日本語非母語話者、自由会話、参加の対称性・非対称性、イニシアチブ・レスポンス分析

*平成16年度生 国際日本学専攻

割を分担し、対称的な参加になっている場合もあれば、特定の参加者によって質問と応答が繰り返され、やり取りが一方向的で非対称的な参加になっている場合もあり、多様であることがわかる。

これまで、NNSが参加するやり取り、いわゆる接触場面⁽¹⁾の会話に焦点を当てた言語教育の研究では、NSとNNSを対象としたものが中心であった。しかし、日本語教育の教室場面では、学習者同士のやり取りが圧倒的に多い。また、その他の環境でも、日本に住むNNSの増加に伴い、NNS同士でやり取りする場面は地域の共同体組織、職場、教会、研究現場等で増加し、多様化している（ファン 1999）。この現状に対応するには、日本語教育の現場で、NSとのやり取りを学習者の日本語使用の場の中心とするのではなく、積極的にNNS同士のやり取りを視野に入れることが必要であろう。そのためには、NNS同士の会話の特徴を明らかにすることを旨とした調査と分析を行い、そこから得られる知見を現場で豊かな対話が促進される活動を実現するための有効なリソースとして活用すべきだと考える。

以上を踏まえ、本稿では、NNS同士の会話を対象とし、発話の連鎖に注目した分析を通して、その参加の様相の対称性と非対称性の特徴を明らかにする。

2. 先行研究

NNS同士を対象にした限られた研究⁽²⁾の一つに、van Lier & Matsuo (2000)がある。van Lierらは、日本人の英語NNS1名が、その参加者よりも英語能力が上、同じ、下という3人の英語NNSの親しい友人とそれぞれ行った3つの自由会話をデータとし、発話量、質問、割り込み等の頻度を比較した。その結果、異なるレベル同士では、レベルが上の参加者が会話維持の労力を負担することでやり取りが非対称になったが、同じレベルのNNS同士では、対称的な会話参加になったと報告している。

日本語の会話を対象にしたものでは、言語管理プロセス理論⁽³⁾に基づくファン (1998, 1999) や春口 (2004) がある。ファンによると、NSとNNSの会話では、NSが媒介言語の「オーソリティー」となり、その規範がやり取りの「基底規範」となることが多いという。そして、NSは会話維持と相互理解を確立する責任を果たす「言語ホスト」となり、NNSは「言語ゲスト」となる（ファン、1998, 1999等）。

分析では、個々の発話に、参加者が言語ホストまたはゲストとして用いる「参加調整ストラテジーの目録」（ファン 1998）から該当コードを割り振る。この分析の枠組みを用いたファン (1998) によると、日本語中級レベルのNNS1名と初級レベルのNNS4名の初対面の自由会話では、中級NNSはNSと違ってホスト的役割をしない傾向があると報告している。

春口 (2004) も、同じ枠組みを使って言語レベルが上級と中級のNNS同士（10組）とNSと中級NNS（10組）の初対面やり取りを比較している。それによると、上級と中級の学習者のやり取りでは、上級学習者にNSに近いホスト的行動が観察されたが、中級学習者にも頻度は低いもののホスト・ストラテジーの使用が観察された。このことから、「第三者言語接触場面での言語的役割は、言語能力の上下によって支配されるわけではない」（同：75）と結論づけている。

ファン (1999) では、初対面の中級日本語NNS同士のペア6組の自由会話を分析した。その結果、両参加者にホスト、ゲスト両方のストラテジーの使用が観察され、NNS同士ではNSが不在のため、(1)NNSは、「標準日本語にこだわらず」（同：43）、自らの「中間言語」を規範として用いると同時に、日本語以外の言語リソース（他の共通言語や互いの母語など）を活用する、(2)ホスト、ゲストの関係が確立しない、(3)逸脱を認識してもそれらをすべて解決しようとせず、会話維持のほうを優先することがわかった。

これらの報告を見ると、van Lierらは、言語能力が上の参加者がイニシアチブを取ると報告しているのに対し、ファン (1998) と春口の研究では必ずしもそうとはいえず、結果がまちまちであることがわかる。

この結果の違いについて次のような推測が可能であろう。van Lierらの研究は、親しい友人同士を対象としており、言語レベルが上のNNSが下のNNSに対し、イニシアチブを取る等の参加者間のやり取りのし方がすでにパターン化していた。一方、ファンと春口の研究では、初対面場面であることから、互いに情報を引き出す等、ある程度ホスト的に振る舞うことがどちらの参加者にとっても適切だったのではないかと推測される。

参加の対称性に関しては、van Lierらもファンもレベルがほぼ同じNNS同士の場合、対称的な参加となる傾向

を報告している。しかし、NSとNNSに比べれば使用言語の言語能力が極めて近いと考えられるNS同士でも、参加が対称的になるとは限らない。このことから、言語レベルと対称的参加の関連づけは、次のように考えるべきではないだろうか。現実には起きている会話参加の様相の実態に迫るには、個々の参加者の言語能力が様相を形成すると考えるよりも、イニシアチブがやり取りの流れのどのような環境で形成されるのか、進行する目下の活動を参加者がどう捉え、そこで適切だと思われる振る舞い方を媒介言語である日本語を用いてどのように達成しているのかといった視点を持つべきであろう。なぜなら、会話参加の対称性と非対称性とは、言語能力の差といった条件や、特定の参加者の一方的な行為によって実現するものではなく、参加者間の局所的な交渉の積み重ねによって形作られる全体的な様相である（Linell & Luckmann, 1991）からだ。

そのためには、これまでのように個々の参加者の発話量や言語行為の頻度、あるいは個々の発話のコード化から得られる数値を参加の様相の指標として、限られたサンプルの分析結果をやり取りの特徴とするよりも、相互行為のプロセスにより注目した分析が必要であろう。参加の様相の協同構築性⁽⁴⁾に着目し、発話と発話の関係に光を当てることで見えてくる特徴の詳細な記述により、NNS同士の会話参加の新たな特徴が把握できると思われる⁽⁵⁾。

3. 研究の目的

本稿の目的は、会話参加の協同構築性の観点から、言語レベルが同程度の既知関係にあるNNS同士の自由会話を対象に、参加の対称性・非対称性の特徴を明らかにすることである。そのために、日本語のレベルがほぼ同じと思われる中級⁽⁶⁾日本語学習者の留学生ペアを研究対象とした。そして、連鎖に注目したコード化システムを用いて会話参加の特徴を量的に把握し、さらに質的な分析を行い、やり取りを通して形成される参加の様相の特徴を示す。そこから、教育現場への示唆を得ることを目指す。

4. 研究方法

4.1 対象者とデータ

対象者は、NNS（中級日本語学習者10名）で、全員、当時都内某私立大学の集中日本語講座に在籍していた留学生である。表1は、その背景とペアの組み合わせである。なお、名前は仮名である。

ペアは、いずれも知り合い程度の既知関係⁽⁷⁾で、通常は日本語でやりとりしている。2003年6-7月に筆者の立会いのもと、話題の指示等はせず、通常の授業と同じ教室で10-20分程度自由に会話してもらった。分析のため、録音・録画したデータは、すべて文字化した⁽⁸⁾。

表1 対象者の背景とペアの組み合わせ

ペア	名前	性別	年齢	母語	レベル ⁽⁶⁾	学習期間
1	A ハイケ	女	20代	ドイツ語	中下	4年
	B ユージョン	女	20代	韓国語	中中	5ヶ月
2	A タニヤ	女	20代	ドイツ語	中中	2年
	B ソーヨン	女	20代	韓国語	中中	1年半
3	A エレーナ	女	20代	ロシア語	中中	3年
	B ソーヨン	女	20代	韓国語	中中	1年半
4	A キョンジュ	女	20代	韓国語	中中	3年
	B マリア	女	20代	ドイツ語	中級	2年半
5	A ルーカス	男	20代	ドイツ語	中上	5年
	B キョウ	男	20代	中国語	中上	1年3ヶ月

4.2 分析方法

データの分析は、まずコード化によって参加の様相を量的に把握し、次に実際の会話データを質的に分析する。それによって、コード化で得られた参加の様相の特徴がどのようなやり取りを経て形成されているのかを明らかにする。

4.2.1 コード化システム：イニシアチブ-レスポンス (IR) 分析

データの分析には、Linell, Gustavsson & Juvonen (1988) によるイニシアチブ-レスポンス分析 (Initiative-response analysis、以下 IR 分析) を用いる。これは、「ターン」を分析単位とし、その連鎖に注目してコード化するシステムである。ターンは、イニシアチブ的性質 (談話を前に推し進める前方志向) と、レスポンス的性質 (「それまでの先行ターンに結びつくことで談話に結束性をもたらす」(Linell et al.1988:417)) 後方志向という両面性を持つ。イニシアチブ的性質は、相手への応答要求と新しい内容導入という2つの性質を指す。各ターンのイニシアチブとレスポンスの性質の組み合わせを、その前後のターンとの結びつき方によって19カテゴリー⁽⁹⁾に分類する。各カテゴリーは、イニシアチブの強さを表2のように6段階評価する。今回の分析では、データの冒頭200ターン⁽¹⁰⁾をコード化した⁽¹¹⁾。その後、評価1-6に該当するターン数を集計し、グラフ化した。

表2 6段階評価に該当する主なターンの性質

	評価点	特徴
イニシアチブが強い ↑ ↓ イニシアチブが弱い	評価6	それまでの談話の流れにリンクしない新しい内容についての応答要求等
	評価5	それまでの談話の流れにリンクしない新しい情報の導入や、先行隣接ターンにリンクしない相手からの応答要求等
	評価4	相手の話の内容を踏まえた質問等の応答要求等
	評価3	相手の質問への応答、相手の発話への新しい情報付加等
	評価2	相づちや最小応答等
	評価1	発話機会のパス等

4.2.2 やり取りの特徴の質的分析

トピック⁽¹²⁾は、参加者間で協同的に展開される (Linell, 1998; Maynard & Zimmerman 1984) ものであり、連鎖と参加の構造に密接に関連している (Maynard 1980)。そこで、参加者間のやり取りがIR分析で得られた様相の特徴にどのように現れているのかを探る観点として、トピック展開に焦点を当てて質的に分析した。

5. 結果と考察

5.1 ターン配分のパターン

連鎖から見た接触場面の会話参加の特徴を明らかにするため、まずIR分析の結果に現れた参加者のターン配分の全体的傾向に注目した。図1は、5組のペアのターン配分の平均をグラフ化したものである。参加者は、全体的に評価2 (主に最小応答や相づち)、評価3 (主に相手の発話内容を踏まえて新情報を付加するターンなど)、評価4 (主に相手の発話内容に関する質問など) という3つのカテゴリーを中心に配分していた。これら評価2、3、4の3つのカテゴリー配分に見られたパターンは、概ね次の三つに分類された。グラフは、パターンの形が分かりやすいように線グラフを用いた (図2、3、4)。

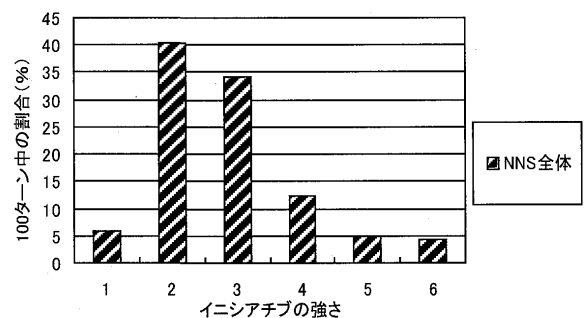


図1 参加者の評価カテゴリーの平均

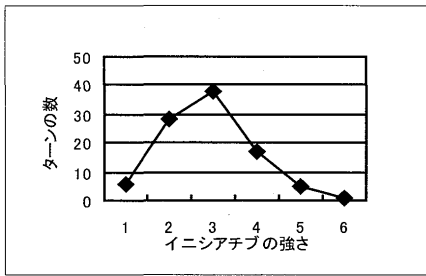


図2 自発的情報付加型

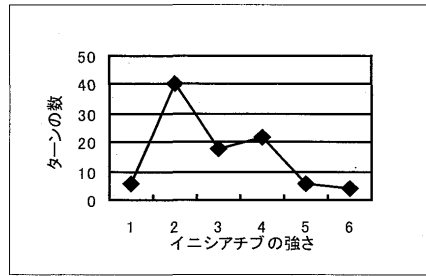


図3 質問+受け止め型

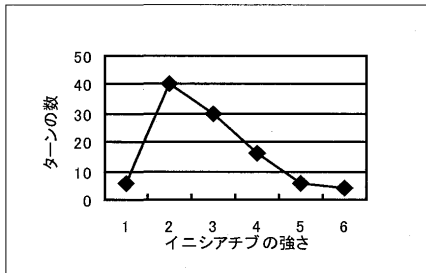


図4 受け止め型

3つの「-型」の名称は、筆者がパターンを特徴づけている評価のカテゴリーからつけた。図2は、「自発的情報付加型」である。これは、評価3（相手の発話を踏まえて新情報を付加するターン）が最も高く、評価2（相づち・最小応答など）や評価4（質問など）の割合が低い。図3は、「質問+受け止め型」のターン配分である。評価2、評価4の配分が高く評価3が低い。図4は、「受け止め型」のターン配分である。評価2が最も高く、評価3、4の順で低くなる。

5.2 ターン配分パターンの組み合わせ

各ペアの会話参加の対称的・非対称的様相の特徴は、ターン配分パターンの組み合わせを見ることでその傾向が把握できる。パターンの一致は、両参加者が自分の持分のターンを、同じカテゴリーに似たような割合で配分したことを意味し、発話の連鎖においては参加のし方が対称的だったことを表す。反対に、パターンの不一致は、参加のし方が非対称的であることを表す。

表3が今回のデータの各ペアのターン配分パターンの組み合わせである。NNS 同士のペアのターン配分が一致したペア（表中の網かけ部分）が2組、不一致だったペアが3組あり、同じ言語レベルの NNS 同士であっても、多様な会話参加をしていたことが窺える。

表3 各ペアのターン配分パターンの組み合わせ

参加者 A (母語)	配分パターン	参加者 B (母語)	配分パターン
1 ハイケ (独)	自発的情報付加型	ユージョン (韓)	自発的情報付加型
2 タニヤ (独)	受け止め型	ソーヨン (韓)	受け止め型
3 エレーナ (露)	受け止め型	ソーヨン (韓)	自発的情報付加型
4 キョンジュ (韓)	質問+受け止め型	マリア (独)	受け止め型
5 ルーカス (独)	自発的情報付加型	キョウ (中)	受け止め型

では、これらのパターンの組み合わせになったペアは、実際のやり取りをどのように展開していたのだろうか。次項で、各ペアの実際の会話をトピック展開を中心に質的に分析する。

5.3 NNS 同士のペアによる対称的・非対称的会話参加の特徴

5.3.1 対称的参加(1):「自発的情報付加型」で一致

両参加者の評価3（相手の発話を踏まえて新情報を付加するターン）が高い割合を占めたこのペアは、一方的な質問とその応答という形に依存するのではなく、相手の先行隣接ターンを踏まえつつ、自発的にコメントし合うことでトピックを展開するようになっている。

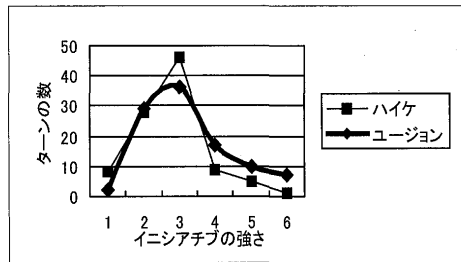


図5 ペア1のターン配分

【会話1】 (H = ハイケ、Y = ユージョン)

01Y どうして日本に来たの？

02H も：(.) 言語：(.) の勉強のために：

日本語を：[(.) もうちょっ [と： 生活

03Y [う：ん [そうなんだ

(1) .h わドイツでべ 日本語勉強したことある [の？

04H [うん 勉強した ##

[う：ん uh

05Y [h あ：いいね： ehh.hh むずかしくなかったの？

06H (.) う：ん [hh 複雑ねえ

07Y [ちょっと文法：とか発音が：

08H そうです [ねえ

09Y [ちがうから： (.) 韓国語 (.) と：日本語は似ている：

10H (.) そう [##

11Y [d からあまり： [むずかしくない

12H [わ漢字も：ちょっと？使う

13Y .h 初めて漢字を見る 見たとき どうだった？ hh

14H むずかしそう hhh [では とてもきれい=

15Y hh [え：それは 絵みた [いな：う：h h h h

16H [=も 絵みた：い そう.h も：

会話1を見ると、やり取りは、当初、01、03、05Yのようにユージョンが質問をし、ハイケが答えるというパターンであった。しかし、ユージョンは質問を繰り返すことだけでトピックを展開していない。ハイケの「複雑ねえ」という評価(06H)に対して「文法や発音がちがう」という例(07Y)で具体化し、09Y、11Yでは、自分の母語の韓国語が日本語に似ていることと対照して、母語のドイツ語と仕組みが異なる言語を学習するハイケの困難さに共感している。一方ハイケは、ユージョンが自分の意見を述べる間、共感を表す相づち(08H、10H)を打つことでこのトピック展開に協力し、さらに12Hで「韓国語と漢字」という、それまで相手が展開した内容を補強する新情報を提供している。この発言は、13Yでトピック化され、14、15、16では、漢字についての二人の評価を重ねることで日本語に対する二人の観点が一つの内容を作り上げている。

このやり取りでは、二人が互いに相手の発言に自分の評価や意見などの新しい情報を付加することで積極的にトピックを共有・展開している。さらに、発話の重なり(07Y、12H、15Y、16H)や笑い、同時発話的相づち(03H)等から、活発なやり取りの様子が窺える。

5.3.2 対称的参加(2)：「受け止め型」で一致

今回のデータでこの組み合わせになったペアに特徴的なのは、トピック化の試みと、その試みを承認もしくは却下が対等になされていること、承認されたトピックで相手がターンを取っているとき、非常に積極的に相手を支援していることである。

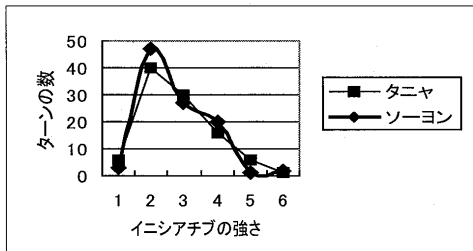


図6 ペア2のターン配分

会話2は、自分自身に関する内容をトピック化する試みが相手によって積極的に承認されている例である。

【会話2】 (S = ソーヨン、T = タニヤ)

- 01S あたしね きのう…は… ともちゃんがきって…
 02T う…ん
 03S キムチ…をはいって…
 04T うん?
 05S ピラップ?
 06T ぴー うん [うん
 07S [ピラップを…(.) 作った:
 08T たつた う…んおいしそう おいしそう
 [うんうんうんうん [うん
 09S [うんうん [そうか 今度きたら…わたしが
 10T あ… うんうん うう んうん行きたい行きたい

この会話では、ソーヨンが自分自身に関する話をトピック化しようと試み (01-07S)、タニヤが肯定的な評価 (08T) で承認し展開する。続く 09S でソーヨンがタニヤの関心の高さ (08T) を受け止めている。タニヤは、10T でその申し出を先取りする形で非常に積極的に受け止めている。また相手がターンを取っているとき、タニヤもソーヨンにも、同時発話的な相づちが見られる。それが評価2のカテゴリーの高いターン配分に表れている。さらに適切な場所で評価 (08T) や感情 (10T) の表明をすることで、相手の話への高い関心を表している。

5.3.1 のバランス型で一致したペアは、話し手と聞き手に分かれるというよりは、どちらも主たる話し手として発言することで一つの内容を作っていく傾向があった。それに比べ、最小応答型で一致したペアは、まとまった内容について語る話し手と聞き手という役割分担が明確で、一方が話しているときには聞き手は積極的に支援し、その内容が終われば役割を交替し、聞き手だったものが今度は主たる話し手となる傾向が観察された。

5.3.3 非対称的参加 (1): 「受け止め型」 + 「自発型情報付加型」

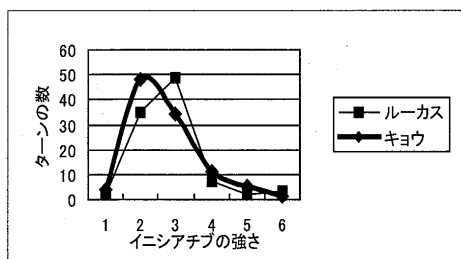


図7 ペア5のターン配分

パターンは一致していないが、実際の会話データに見られるトピック展開は、先のペア2による「受け止め型」での対称的参加に近い特徴が見られる。すなわち、主たる話し手と聞き手がまとまった内容を話した後に交替し、聞き手であるときは、相づちや質問などで積極的に支援したり、時には情報を付加して展開したりするというものである。

この組み合わせになったペアは2組ある。ここでは、その特徴がよく現れているペア5を取り上げて分析する。やり取りは、まずキョウがルーカスにアルバイトや来日の時期や理由について尋ねる質問

から始まった。次に挙げる会話3は、その後、ルーカスがキョウに同じ質問 (138L) をするところである。

【会話3】 (L = ルーカス、K = キョウ)

- 138 L キョウさんはいつ: 日本に来ましたか
 139 K あ こう:ん 去年のしがつから
 L し [がつ
 K [日本に来ました
 140 K はい hでも前に:h(.) 日本 日本語をあまり勉強しなかったので:
 141 L あそ [うですか
 142 K [ちょっと大変(.) hさんかげつ(.) ぐらい:日本語勉強してから
 143 L あ [ほんと
 144 K [日本に来ました はい
 145 L あhあ:: すばらしいそれは
 146 K いえいえ(.) う:ん ちょっと::ことばで::漢字は::多かったので::
 L うん
 K う:ん欧米の方より:h° う::ん° 簡単だと思います
 147 L あそうですか
 148 K はい でも:hが [らいごが: 外来語がお h多いので:hhhh.hh
 149 L [やっぱりすばらしいそんなに##
 そうですね::
 150 K [はい
 151 L [私もあまり(.) わかりません
 152 K うん は [そんなぜんぜん
 153 L [あの カタカナで:あらわす(.) あわ あらわしている::
 K はい
 L 英語の言葉は::
 K うん
 L すごく(.) わかりにくいとおもいま [す
 154 K [はいはい [はい

キョウは、ルーカスの質問に139Kで答えるだけでなく、140-144Kで新しい情報を付加している。それに対しルーカスは、145Lで賞賛を述べることで、キョウの日本語能力の高さを評価し、キョウは、それを146Kで否定することで適切に対応している。

その後、キョウは、母語である中国語とルーカスの母語である欧米の言語との違い(漢字の存在)に言及することで、自分の日本語能力が高く見えるのは、自分の能力ではなく言語の特徴によると説明している。ルーカスは、147Lでそれを受け止め、149Lで、再度賞賛することで、キョウの「自己卑下」に同調しない。この自己卑下に続く次の話し手の非同意は、自己卑下した話し手に支援的であることを意味しており(Pomerantz 1984)、ルーカスの協調的な参加のし方を表している。

キョウは、さらに「外来語の難しさ」に言及し、先に述べた自分の母語の有利な点(漢字)と日本語学習における欧米語の有利な点(外来語)を対比させている。このやり取りを通して、トピックの焦点は、ルーカスの母語である欧米語(ドイツ語)に自然に移行する。ここでは、質問で相手から答えを引き出すのではなく、相手が語る資格を持つ内容にやり取りの焦点を移すことで、ルーカスが参加する場をキョウが用意しているように見える。そして、ルーカスは、この機会を適切に利用し、151Lで「自分も(キョウと同様外来語は)わからない」ということで、キョウとの合意点を示している。

このペアは、互いに話し手と聞き手の役割を交替しつつ相手の発話に応答、支援し合っており、それがIR分析の結果に見られる両者の評価2と3の高い配分の背景となっている。

5.3.4 非対称的参加(2):「質問+受け止め型」と「受け止め型」

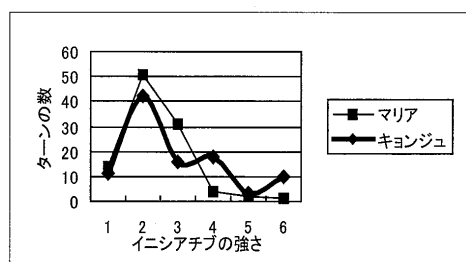


図8 ペア4のターン配分

全体的を通して、主に「キョンジュの質問→マリアの応答→キョンジュの相づち」という一方向的なパターンになっている。しかし、両者のターン配分は、評価2（最小応答）が最も高くなっていることから、このペアは、相づちによって互いの話を積極的に受け止めていたことがわかる。しかし、先述のルークスとキョウのペアに比べ、両者の評価3（相手の発話に新情報を付加するターン）が全体に占める割合が低い。

【会話5】 (K=キョンジュ, M=マリア)

13 K (日光に行くのは) なんで? あ [汽車で

14 M [## あ:m 電車で

15 K あ: 電車で: あ: 旅行で: 旅行? 旅行で行きますか?

16 M はい [はいず

17 K あ: [: うらやましいね:: あ:: う:: んいつ国に帰りますか
マリアさんは?

18 M h あ 12月: に: 帰ると思います

19 K あ:: ほんと: ? あずっと: (寮の名前) で: ん ## # ますか

20 M はい

21 K あ:: ん そうか

22 M はい

23 K ん 私は: あ:: 今すぐ かえ:: 帰りま:: す

24 M あそうですか

25 K うん あ あまり:: あ: m さんじゅう? さん: じゅっかんくらい?
のこってい [ます うん

26 M [あ:: ソウルに帰りますか ソ ソウル

27 K [ソウル はい そうで私の:: あ: うちが (.) あ ありますから:: ソウルでいきま:: す

28 M [ソウ° は: そうですか° は::

日光に行くというマリアの発言を受けて、キョンジュはそれを展開する質問 (13、15K) をするが、マリアは最小応答 (14、16M) で答え、新しい情報を自分からは提供していない。トピック開始の質問に対する長く十分な情報を盛り込んだ応答は、トピック化の受け入れの意思表示である (Maynard & Zimmerman 1984) が、上の会話に見られるマリアの反応は最小応答のみであり、トピックの展開に必要な情報が十分提供されていない。そこで、キョンジュはトピック化の試みを打ち切り、17K の質問で新しいトピック化の試みをする。しかし、マリアは再び最小応答 (20M) で答え、同じ質問を相手に返すことも、自分の情報を付加することもしていない。Maynard & Zimmerman (1984) は、質問されたときに同じ質問を相手に返さないことで暗示的にトピック化を相手に任せる場合があることを指摘している。結局キョンジュが自分の情報を提供することで二人の帰国をトピック化している (23K)。

マリアは、会話維持の仕事をすべてキョンジュに任せているわけではない。たとえば、キョンジュが主たる話し手であるときは、マリアは相づちで支援し、質問 (26M) をしてトピック展開に協力している。キョンジュも、相手から情報を聞き出すだけでなく、自分のことをトピック化し、談話を展開している (23K)。しかし、これまで見てきた対称的様相が見られるペアと比較すると、相手の発話や意見の補強 (ペア1) や、相手との共通点に焦点を当てたトピック展開 (ペア5) があまり見られない。全体的に両者の評価3の割合が低いのは、このようなやり取りを反映していると考えられる。

全体的な特徴をまとめると、このペアは、相手の発話を踏まえて情報を提供し合うのではなく、基本的にキョンジュの質問と情報提供、そしてマリアの応答によってやり取りが展開するという非対称的な参加をしていたといえる。

5.4 考察：相手の発話への新情報付加と会話参加の様相の関係

今回、IR 分析によるターン配分のパターンの観察から、同程度の言語レベルの NNS 同士のやり取りでも対称的・非対称的な会話参加が見られることがわかった。しかし、やり取りを詳細に見ると、パターン不一致のペアの参加の様相に違いが見られた。

パターン不一致の3組のうち、「質問＋受け止め型」と「受け止め型」の組み合わせであったペア4は、やり取りが一方向的で、トピック展開がスムーズに行われていなかった。しかし、「受け止め型」と「自発的情報付加型」の組み合わせのペア5は、そのスムーズなトピック展開の仕方から対称的参加に近い特徴が見られた。この結果について、評価3のカテゴリー（相手の発話を踏まえて新情報を付加するターン）がやり取りに果たす役割と、会話参加の様相関係を考察する。

やり取りが一方向的になっていたペア4の場合、両参加者が配分する評価3の割合に違いが見られた。特定の目的を持たない自由会話においては、相手の先行隣接ターンの内容が談話を推進する重要なリソースになる（Foppa 1990）。したがって、そのリソースの量が参加者間で差があるとき、スムーズなトピック展開が困難になり、内容も深まりにくくなる可能性がある。ペア4では、キョンジュが主に情報提供し、マリアは最小応答が多く、情報提供に貢献していない。この参加者間で提供される情報リソースの非対称性がぎこちないトピック展開に現れていたと考えられる。

一方、対称的参加の特徴が見られた4つのペアの場合、いずれも評価3の割合が高く、また、参加者間でその割合に大きな違いがなかった。つまり、談話推進のリソースが両参加者から提供されていた。ターン配分パターンが一致していなくても、対称的参加の特徴が認められたのは、このリソース量の対称的な提供が背景にあると思われる。

評価3が両者とも最も高い「自発的情報付加型」で一致したペア1のやり取りでは、両参加者が互いに自発的な意見や評価を重ねて、談話の内容を協同で作り上げるやり取りが見られた。このようなやり取りは、「協同発話権に基づく会話参加」（村岡 2003：250）と考えられ、「単独発話権」（話し手が話し、聞き手は相づちで参加する）に基づく会話参加と対比される。村岡によると、「協同発話権に基づく会話参加」では、トピック展開の確かな予測と、相手の発話への素早く適切な反応を要求するため、高い日本語能力と、トピックについての知識や経験等の共有が必要であるという。

しかし、本稿では、日本語能力に制限のある中級レベルの学習者のやり取りに「協同発話権に基づく会話参加」の特徴が観察された。その理由としては、日本語能力の制限が、互いに聞き取りやすい速度、語彙・表現の選択の限定等をもたらし、かえってお互いの理解を助けた可能性があること、本稿の NNS が同じ機関に所属する既知関係の留学生同士であり、知識と経験が共有されていたこと、対称的参加が達成されたペアには、そこからさらに共通基盤を構築する志向があったことが考えられる。その特徴は、ともに学習者として日本語について語る会話例1や3に現れている。既知関係にある NS と NNS のやり取りが、まず互いの共通基盤を模索することから始まることもある（岩田 2005）のに対し、今回のデータは、知識や経験の共有を前提にやり取りを展開できる可能性を持つ NNS 同士のペアならではの特徴を示している。そこに見られる日本語使用は、NS の日本語を規範として志向するのではなく、両者の共通基盤構築を志向するものである。

また、双方の日本語レベルが同じ程度の NNS であることは、発話機会の配分の管理ということにも関わってくる。NS-NNS 間のやり取りの場合、NS は NNS の日本語の発話機会を確保するために、自分の発話を抑える傾向があると指摘されている（一二三 1999）。もし、この指摘が正しいとするなら、同じレベルの NNS 同士の場合、特定の参加者が日本語使用機会の分配を配慮する必要がないことになる。この点も5組中4組のペアに対称的参加の特徴が見られたことにつながったと考えられる。

今回の結果は、規範的日本語志向ではなく、共通基盤構築を志向する NNS 同士の会話が自発的で積極的な会話参加の経験を提供できる可能性を示唆している。会話教育の活動のデザインにおいては、NS の話す日本語に

NNS の日本語を近づけることだけを目指すのではなく、日本語使用を他者との関係を構築するプロセスと捉え直し、NNS 同士の会話を積極的に組み込むことが必要であると考えます。

6. まとめと今後の課題

本稿では、NNS 同士の自由会話における参加の対称性と非対称性の特徴を IR 分析を用いて発話の連鎖の観点から明らかにした。さらにトピック展開に焦点を当てることで、参加の様相がどのようなやり取りを経て作られるのかを質的に分析した。その結果、参加者は、自分の持分のターンを主に評価 2 (相づち・最小応答)、評価 3 (相手の発話を踏まえて新情報を付加するターン)、評価 4 (内容に関する質問) に配分し、そのパターンは、「自発的情報付加型」、「質問 + 受け止め型」、「受け止め型」の 3 つになることがわかった。

パターンの組み合わせでは、パターンの一致 (対称的参加) とパターンの不一致 (非対称的参加) が見られたが、パターン不一致のペアのやり取りが対称的参加に近かったため、全体的な傾向として参加が対称的になることが認められた。

この結果から、発話の連鎖から参加の様相を調べることによって、より複雑で相互行為的な対称性、非対称性の特徴が把握できること、NNS 同士の自由会話で対称的な展開が可能であることを示した。

現場への示唆としては、相手と協力して会話を展開する対称的会話参加の経験が可能であるという NNS 同士の会話の意義を視野に入れた現場の活動のデザインの必要性を提案した。

今回、連鎖に注目した分析を通して「協同発話権に基づく会話参加」(村岡 2003) が見られ、それが知識、経験の共有を前提とした NNS 同士ならではのやり取りの特徴である可能性を示した。では、共有部分が少ない初対面の場合、その日本語使用は何を志向し、それが参加の様相にどう影響するのか。この特徴を探ることは、教室における人間関係構築の土壌を作る活動を考える上で有効であろう。

さらに、やり取りの構成人数、NNS の言語レベルや出身文化圏、活動のタイプが異なる場合の参加の様相はどのようなものか。IR 分析を出発点とした多様なデータの質的分析を通して、参加の様相の対称性、非対称性をより多角的に把握することが今後の課題である。

付記: 本稿は 2004 年度お茶の水女子大学大学院修士論文の一部を加筆修正したものである。

謝辞: 本稿をまとめるにあたり、有益なご助言を下さったお茶の水女子大学の岡崎眸先生に感謝の意を表します。

註

- (1) 本稿における接触場面とは、参加者の中にやり取りで使われる言語の NS と NNS がいる場合の「相手言語接触場面」と、いずれの参加者も使われる言語の NS ではない「第三者言語接触場面」(ファン 1998, 1999) を指す。
- (2) このほかに、全体的な会話参加を対象としているものではないが、Varonis, E. M. & Gass, S. (1985) が意味交渉に焦点を当てて NNS 同士と NS - NNS のやり取りを比較している。それによると、NNS 同士のほうが意味交渉がより多く起きていた。NNS 同士の場合、意味交渉をしてもフェイスを脅かす危険が少ないが、NS-NNS 間では使用言語の NS か NNS かという両者の「地位の違い」が際立つためではないかと示唆している。
- (3) 「言語問題」(language problems) を扱う言語管理理論の下位理論で、コミュニケーションにおける「規範からの逸脱」から始まる留意、評価、調整に注目し、そのプロセスを体系化する理論 (ネウストプニー 1995)。
- (4) 本稿での「協同構築」は、joint construction あるいは、co-construction をさす。「協働」(collaboration) は、相手との間に連帯感など、ある関係を築くべく両者が働きかけ合うやり取りをとした。
- (5) 連鎖に注目することで、参加の様相の動的な特徴を提示することが可能である。NS-NNS のやり取りでは、これまで NS がイニシアチブを取ると言われていたが、発話の連鎖に注目して分析した岩田 (2005) では、初め一方向的だった留学生と日本人大学生のやり取りが、アイデンティティ・カテゴリーの変化によって次第に対称的な参加へと移行しており、参加の様相が固定的ではなく、参加者間で交渉される動的なものであることがわかった。
- (6) NNS の日本語レベルは OPI の判定基準に準ずる。* の NNS は、レベルチェックテストと当時の在籍クラスのレベルにより判定した。
- (7) 初対面では選ばれるトピックが限定される (三牧 1999) 等、固定的な会話展開になる傾向があるが、既知関係なら、開始から短時

間で参加者に共通する背景知識を踏まえた自由なやり取りの展開が期待される (Maynard & Zimmerman, 1984)。また今回の収録を現場の自由会話の実践に近いものにするため、既知関係を対象とした。

- (8) 文字化に用いた記号は表4の通りである。好井・山田・西阪 (1999) に記載されている「トランスクリプトで用いられている記号」を参考に筆者が加筆し作成した。なお括弧内の記述は、今回、独自に行ったことである。

表4 文字化に用いる記号と説明

記号	意味
[]	複数行にまたがる角括弧: 参加者たちのことばが重なっていることを示す (本稿では、重なりが始まる個所のみ示した)。
=	ことばとことばのあいだ、もしくは行末と行頭におかれた等号: 言葉、もしくは発話が途切れなくつながっていることを示す。
(数字)	丸括弧でくくられた数字: その数字の秒数だけ沈黙があることを示す。また、ごく短い間合いは、「(.)」という記号で示す
:	コロンの列: 直前の音が延ばされていることを示す。
?	疑問符: 語尾の音が上がっていることを示す。
。	句読点: 語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。
hhh	hの列: 呼気音を示す (本稿では主に「笑い」にこの記号を用いた)。
.hhh	直前にピリオドをとまう h の列: 吸気音を示す。
° °	上付きの丸: これで囲まれた個所の音が小さいことを示す。

- (9) Linell et al.(1988)では18 カテゴリーだが、本稿では1つ新規に作成し、19とした。カテゴリー分類のためのコード化ルールの詳細は、岩田 (2004, 2006) を参照されたい。
- (10) 5つのデータのうち、最も短いものが196ターンであったため、それとはほぼ同量として他のデータも200ターンで区切り、それを分析対象とした。
- (11) コード・システムの客観性を期すため、談話分析の経験者に、全データの20%に相当するデータのコード化を依頼し、筆者の行ったものと照合した。その結果、約81%の一致率であった。一致しなかった部分に関しては、検討し合意に至った。
- (12) ここでの「トピック」とは、通常用いられる意味「談話における『～について』」(Linell 1998) という緩やかな定義とする。

参考文献

- (1) 岩田夏穂 2004 日本語非母語話者が参加する相互行為の対称性および非対称性について—イニシアチブ・レスポンス分析の試み—、(未公刊) お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文
- (2) ———2005 日本語学習者と母語話者の会話参加における対称性の変化—留学生と日本人大学生の場合—、世界の日本語教育, 15, 135-151、国際交流基金。
- (3) ———2006 イニシアチブ・レスポンス分析の課題と可能性—日本語の会話に適用する場合—、第31回日本言語文化学会、ポスター発表要旨、言語文化と日本語教育, 31, 日本言語文化学会。
- (4) 春口淳一 2004 言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ストラテジー—第三者言語接触場面における会話参加の一考察—、千葉大学日本文化論叢, 5, 86-73。
- (5) 一二三朋子 1999 非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連、教育心理学研究, 47, 490-500。
- (6) ファン・S. K. 1998 接触場面と言語管理。日本語シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議要録、1-16。国立国語研究所。
- (7) ———1999 非母語話者同士の日本語会話における言語問題、社会言語科、2 (1), 37-48。
- (8) 三牧陽子 1999 初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー、日本語教育、103、49-58、日本語教育学会。
- (9) 村岡英裕 2003 アクティビティと学習者の参加—接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために、宮崎里司・H. マリオット編著、接触場面と日本語教育—ニューズブニーのインパクト—、245-259、明治書院。
- (10) 村岡貴子・三牧陽子 2000 大阪大学豊中キャンパスにおける「日本語パートナー」の特性と活動—1999年第1学期の実践報告および考察—、大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流、4、55-65。
- (11) 好井裕明・山田富秋・西阪仰 1999 会話分析への招待 世界思想社。
- (12) Foppa, K. 1990 Topic progression and intention. In Markova, I., & Foppa, K. (Eds.), *The Dynamics of Dialogue*. 178-200. New York, NY: Harvester Wheatsheaf.
- (13) Linell, P. 1998 *Approaching dialogue*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

- (14) Linell, P., Gustavsson, L., & Juvonen, P. 1988 Interactional dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis. *Linguistics*, 26, 415-442.
- (15) Linell, P. & Luckmann, T. 1991 Asymmetries in dialogue: some conceptual preliminaries. In Markova, I., & Foppa, K. (Eds.) , *Asymmetries in dialogue*. 1-20. New York, NY: Harvester Wheatsheaf.
- (16) Maynard, D. W. 1980 Placement of topic change in conversation, *Semiotica*, 30 (3/4) ,263-290.
- (17) Maynard, D.W. & Zimmerman, D. H. 1984 Topical talk, ritual and the social organization of relationships. *Social Psychology Quarterly*, 47 (4), 301-316.
- (18) Pomerantz, A. 1984 Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes, J. M. tkinson & J. C. Heritage (Eds.) *Structure of social action*, 57-101.
- (19) van Lier, L. & Matsuo, N. 2000 Varieties of conversational experience: looking for learning opportunities. *Applied Language Learning*, 11 (2), 265-287.
- (20) Varonis, E. M. & Gass, S. (1985) Non-native/non-native conversations: a model for negotiation of meaning, *Applied Linguistics*, 6(1), 71-90.

(2006年12月1日受理)